容貌相似

知仕臣乎、將處士邪、候曰、渠爲吾講兵書、處士由井民部助者也、名正雪　蕃山正色曰、余熟視其貌、以察其意、君勿復近如彼士、○略下

〔先哲叢談五〕源君美、字在中、新井氏○略中

白石自題肖像詩云、蒼顏如鐵鬢如銀、紫石稜稜電射人、五尺小身渾是膽、明時何用畫麒麟、

〔古事記上〕此時阿遲志貴高日子根神自阿下四字以音到而、弔天若日子之喪時、自天降到若日子之父、亦其妻皆哭云、我子者不死有祁理、此二字以音下效此我君者不死坐祁理云、○略中此二柱神之容姿、甚能相似、故是以過也、

〔古事記傳十三〕容姿は加本(カホ)と訓べし、書紀に面貌、顏色、顏容、顏貌、姿色、相貌などは固にて、容姿形容、形姿貌容容止などをも、皆然訓り、萬葉にも、姿貌容などあり、加本とは、先は、面の形樣を云名にて、總ての身體の形樣までを兼たり、右の字どもにても心得べし、漢文に好色など云色を、中昔よりこなたは、御國にて伊呂といへども、そは古言に非ず、故書紀には、其意の色字をも加本と訓り、さて又今世には たゞに面を指て加本といへども、そは違へり、此の二柱神の相似たるも、たゞ面のさまのみならず、總ての身のさまゝでを云なれば、今世人の心には、此容姿をも加本加多知と訓では、言足ぬげに思ふめれどさにあらず、

〔日本書紀十應神〕九年四月、有壹伎直眞根子者、其爲人、能似武內宿禰之形、○略下

〔日本書紀十四雄略〕四年二月、天皇射獵於葛城山、忽見長人、來望丹谷、面貌容儀相似天皇、天皇知是神、猶故問曰、何處公也、長人對曰、現人之神、先稱王諱、然後應導、○導一本作道或導天皇答曰、朕是幼武尊也、長人次稱曰、僕是一事主神也、

〔日本書紀二十六齊明〕元年五月庚午朔、空中有乘龍者、貌似唐人、著青油笠、而自葛城嶺馳隱膽駒山、及至午時、從於住吉松嶺之上、西向馳去、

〔甲陽軍鑑十二品第三十九〕四月○天正元年十一日未の刻より、信玄公御氣相あしく御座候て、御脈殊の外はやく候、又十二日夜亥刻に、口中にはぐさ出來、御は五ツ六ツぬけ、それより次第によはり給ふ、